二〇二四年度 日本近代文学会秋季大会

日本近代文学における東アジア表象

《特集》

――「事件」と文学の間――

【大会趣旨文】

日本近代文学に現れた東アジアをめぐるさまざまな表象と想像は、当時の越境的な状況の中で時代と歴史とに関する文学者たちの多様な認識を示している。それをあえて「事件と文学の間」で追究することで、多様で流動的な東アジア表象に具体的な意味を提示できよう。

中国の王朝を中心とした朝貢体制が崩壊した近代において、西洋の衝撃を受けた日本と東アジア諸国は、新しい秩序を模索するなかで、東アジアにおける自身の位置づけを行った。激動する明治・大正という歴史的な転換期において、日本人の時代感覚に衝撃を与えたものとして、日清・日露戦争、第一次世界大戦など国際関係上の大きな紛争もさることながら、時代を刻む出来事、すなわち数々の「事件」も挙げなければなるまい。例えば、1872年の「マリア・ルス号事件」は日中関係を大きく転換させるきっかけとして記憶されている。また「李鴻章狙撃事件」(1895年)、「伊藤博文暗殺事件」(1909年)や関東大震災時に発生した「朝鮮人虐殺事件」(1923年)などは東アジア三カ国の関係に大きな影を落とした。このような動乱の時代を語る黒川創氏の『暗殺者たち』(2013年)が示しているように、多数の「事件」が、政治や社会のレベルに止まらず、文学者の時代認識と文学的創造力を強く刺激したことは容易に想像できる。

明治・大正期を探ると、日本膨張論を唱えた徳富蘇峰、「満韓ところどころ」を書いた夏目漱石、従軍記者として戦時中国に赴いた正岡子規と国木田独歩、日露戦争の従軍記者になった田山花袋、岡本綺堂や半井桃水などは、「事件」を文学に投影し、国家と個人、日本と東アジア、日本と世界をみつめ、多様なメディアに作品を残した。一方、「歴史的な事件」と言わずとも、文学者の目には重大な「事件」・出来事として映る事象も数多く発生した。国境を超えた「知」の交流も文学創作上の「事件」と捉えるならば、芥川龍之介の『支那游記』、谷崎潤一郎の「蘇州紀行」や「上海見聞録」、佐藤春夫の『南方紀行』などが、日本の作家のアジア体験と認識を示している。歴史書に書かれた「事件」と、文学者の目に映った「事件」との落差と関連を吟味し、明治・大正期の日本の文学者たちがそれらを通して時代を把握、表象、記録した実態を検証することの意味は大きい。また、そうした文章を通して、近代史上の日本人が東アジアを想像し、認識した眼差しを再確認することで、混沌とした東アジアの現状に生きるわれわれにも何らかの発見が得られることが期待できよう。

上記の問題を問うことは、近代日本と東アジアの多様な関係を多角的・多時空的に捉え、それをめぐる理解と可能性を文学的に再確認する作業である。日本と東アジア世界との関係を、文学者の体験と想像、政治体制と国際秩序、移動と知的越境などにおいて再発見し、さらに日本近代文学と東アジア世界のこれからを展望したい。

10.26 13:30～ [SAT]

《**開会の辞**》有元伸子

《**特集**》日本近代文学における東アジア表象――「事件」と文学の間――

黒川　創　極東アジアに共有される「近代文学」誕生のプロセス

斉　金英　夏目漱石の満洲表象と石光真清が語った露清戦争――交錯する帝国主義時代の「民」――

王　憶雲　島村抱月と台湾：芸術座の台湾巡演

位田将司　「関東大震災」という「戦争」――横光利一と天皇制国家

《**懇親会**》

10.27 10:30～ [SUN]

《**研究発表**》

【第一会場】

〔**個人発表**〕

伊東弘樹　東京を「裏返す」小説――案内記としての山田美妙「武蔵野」

鶴田奈月　広津柳浪「小舟嵐」の位置――社会の罪との関係をめぐって――

許　　可　日露戦後の復古的な趣味における文武性――「風流」と「元禄趣味」を中心に

児島春奈　変奏する「戯作者」的態度――永井荷風「毎月見聞録」における「文学」の問い直し――

近藤史織　宇野浩二『枯木のある風景』における芸術家の死―絵画論から文学論への転換

【第二会場】

〔**個人発表**〕

福田　涼　相剋する欲望――三島由紀夫『仮面の告白』論――

薛　昇勳　坂口安吾と花森安治の「教祖」批判

〔**パネル発表**〕

山﨑義光、岡英里奈、奥村華子、森岡卓司（ディスカッサント）村田裕和

〈新開地〉をめぐる統合と紛糾・希望と幻滅の〈現実〉表象

【第三会場】

〔**個人発表**〕

岡和田晃　「アイヌ文学」と「給与地」闘争

――「階級的組織化」をめぐる向井豊昭・石井清治・原田了介の視点から

片野智子　安部公房とヌーヴォー・ロマン――『燃えつきた地図』を中心に

《**閉会の辞**》久米依子